



# 平成29年度 全国学力学習状況調査の結果について

御嵩町(組合)教育委員会



## 御嵩町で学ぶ児童生徒一人一人に生きる力を育む!

文部科学省は、下記の目的で、平成29年度全国学力・学習状況調査を実施した。

**調査の目的** 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

調査対象は、小学校6年生と中学校3年生で、調査内容は、国語、算数(数学)、質問紙調査(児童生徒対象と学校対象)である。御嵩町教育委員会は、保護者や地域住民に対して説明責任を果たすために、子どもたちの学力・学習状況について、積極的な情報提供を行うとともに、教育施策の成果と課題を検証し、学校・家庭・地域社会が協力して、その改善を図ることが重要であると考えている。そこで、町長、教育委員会、可児郡小中学校長会等で協議し、「先生や児童生徒のやる気につながる」「保護者や地域住民の協力を得る」ために、平成29年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領「調査結果の公表に関しては、教育委員会や学校が、保護者や地域住民に対して説明責任を果たすことが重要である一方、調査により測定できるのは学力の特定の一部分であること、学校における教育活動の一側面であることなどを踏まえるとともに、序列化や過度な競争が生じないようにするなど教育上の効果や影響等に十分配慮することが重要である。」に基づいた公表を行う。

ここに公表する内容は、各校が9月までに保護者等に向けて公表した内容の一部をまとめたものである。特に、考察・課題、改善策が重要である。各校及び御嵩町教育委員会の取組について、忌憚のないご意見をいただき、更なる教育及び教育施策の改善、各児童生徒の全般的な学習状況の改善につなげていきたい。

### 中学校

平均正答率による分析では、全国も岐阜県も、昨年度の結果と比較すると、国語A・B、数学A・Bともには2~6ポイント上がり、昨年度と比較して問題の難易度がやや下がっていると言える。御嵩町全体の結果は、国語A・Bは、全国と比較してほぼ同等、数学A・Bは全国と比較してやや低く、昨年度の御嵩町と比較しても、国語は向上しているが、数学に課題があり、個に応じた指導について、更なる対策が必要である。中央値による分析では、御嵩町全体の結果は、国語A・Bは、全国と同等で、数学A・Bは全国と比較してやや低くなっている。平均正答率と同様な分析結果である。

### ◆上之郷中学校

平均正答率による分析では、国語A・B、数学A・Bとも、全国と比較して高く、生徒個々の生活や学習の状況を把握し、その実態に即した支援を、家庭の理解と協力も得ながら全校体制で進めている成果が出ている。中央値による分析では、全国と比較して、国語A・数学Aは、高く、国語B・数学Bはやや高い状況で、上位に位置する生徒が多いことが分かる。少人数指導の成果だと言える。

#### 考察・課題

◇国語A、数学A、国語Bともに全国平均、県平均共に10ポイント以上上回る良好な結果であった。数学Bについては、上回る結果ではあったが、全国平均+4、県平均+2ポイントであった。国語Aでは、全員が83%以上、数学Aも全員が72%以上の正解率であった。両教科とも、基礎的な知識や技能が全員に定着している。特に国語の基礎的な知識や技能は高得点を記録している。数学Bでは、得点分布がやや二極化し差が見られるが、低い層でも正解率は40%を超えている。その生徒でも無解答はほとんどなく、一生懸命に問題に向かい解答しようとしている。日頃の真面目で意欲的な学習姿勢と、学ぶ雰囲気が醸成されている落ち着いた学習集団が生徒の基礎学力の土台となっている。その上で、生徒一人ひとりの実態を的確に把握し、個に応じたきめ細かな指導を行うことや確実な定着の見届けを継続していることが成果を生んでいる。

◇学校の規則や友達との約束を守る、困っている人を助ける、いじめをしないなど規範意識が高い。地域行事やボランティア活動に積極的、自主的に参加、活動している生徒の割合が高い。就寝時間が不安定、携帯等使用時間やルールがない、家庭での会話が少ない等、基本的な生活習慣ができていない生徒の割合がやや高い。難しいことでも失敗を恐れず挑戦する(5人)、友達の前で自分の考えや意見を発表することができる(6人)。積極性に欠ける部分が見られる。自分に良いところがない(やや2人、ない1人)。将来のゆめがない(やや2人、ない1人)。学校に行くのは楽しくない(やや2人)。学校で好きな授業がない(やや3人、ない1人)。自信がもてない生徒や自己肯定感の低い生徒が依然として見られる。学習塾に行っていない(10人)。学校での授業、指導体制が重要である。

#### 改善策

○国語の授業だけではなく、他教科、総合的な学習の時間などでも“書く機会、時間”を確保し、量、質の充実を図っていく。また、“話す力”を高めるために授業や集会、行事などの機会を生かし、人前で自分の考えを堂々と話せるように指導し、自信を持たせる。○数学科、英語科の授業を中心として、補助教員(支援員)による指導援助や個別支援の機会を継続し、一人ひとりへの見届けをさらに深めていくことで、理解ができていない生徒に対応していく。また要援助生徒については、可能な限り別教室で個別授業に取り組む。

○“3つの見届け(実態・学習状況・定着)”を確実にやる。特に一人ひとりに課題が確実に理解されているか、定着しているかを見届けを丁寧に行う。

○行事や部活動、ボランティア活動、主張大会、英語スピーチコンテストなどに積極的に取り組ませ、やりきらせる経験を蓄積することで自己肯定感を持たせる。○キャリアアンケートを定期的実施し、キャリア教育を進めることで、将来の生き方を考えさせる。そしてそのために必要な資質、能力、資格、進路などこれからの生き方を考えたり、見つめさせたりすることで将来の夢や目標を明確にもたせる。

## ◆向陽中学校

平均正答率による分析では、国語Aは、全国と比較してほぼ同等、国語Bはやや高く、昨年度と比較しても、国語が大きく向上している。数学A・Bはともに、全国と比較してやや低くなっているが、昨年度より向上している。個に応じた指導の成果であるが、更なる指導が必要である。中央値による分析では、全国と比較して、国語A・Bはほぼ同等で、数学A・Bは、やや低い状況。低位の生徒に対する、基礎的な学習に関して、更なる指導が必要である。

### 考察・課題

◇国語A・B共に、平成26年度全国学力・学習状況調査(小学校6年生)時には、県・全国平均を下回っていた「書くこと」「読むこと」領域が、県・全国平均並かやや上回る結果となった。「書くこと」の向上については、昨年度より全教科において考えを書き表す指導の充実を図ってきたことが要因の1つと考える。「読むこと」は、平成28年度の国語Bにおいても平成25年度(小6時)と比較し向上していたことから、中学入学時より毎日実施してきた朝読書の成果であると考えられる。漢字など知識の定着には、弱さがあった。

◇数学A・B共に、県・全国平均を下回っている。数学Aでは、「数と式」領域を中心に、aやXといった文字を含む問題に弱さがあった。数学Bでは、問題に示された条件や資料の傾向などを的確に捉えて処理したり思考したりすることに、どの領域でも弱さがあった。

◇平成28年度と比較して、朝食の摂取、同じ就寝時間や起床時間、約束やいじめに対する認識、将来への夢や希望などが改善している。また、学校に行くことは楽しいと思う生徒が大幅に増加している。これらは、学年による特性が現れている部分が大いと考えられる。学習塾や家庭教師を利用していない生徒が過半数を占め、自ら計画を立てて復習を中心とした家庭学習をしている実態は変わっていない。

### 改善策

○各授業において生徒の「導入時の実態」「学習状況」「学習の定着状況」を見届け、指導・援助を行っている。そして見届けによって把握した実態を基に、具体的な指導・援助を用意して次時の授業を行っている。また、生徒が互いに考えの説明をし合ったり、コツを教えたり確認したりする学び合いの場を意図的に位置付けることで、より深い学びができるようにしている。教科の特性により、習熟度別少人数指導(数学)やティーム・ティーチング(英語)、補助教員による個別支援(主に技能教科)などを行い、指導・援助の充実を図っている。○国語では、漢字に取り組む時間(毎授業5分間)を確保し、週末には漢字テストを実施することで、漢字の定着を図っている。また、授業開始2分前に音読を行ったり、授業終末ではキーワードを使ったまとめを行ったりすることで、学習内容の定着や話す力・書く力の強化を図っている。朝読書は、今後も継続していく。○数学では、授業開始2分前から計算を中心に練習問題を行い、解き方を丁寧に解説している。授業後半では評価問題を問題し、確実に問題を解けているかを見届け、指導・援助を行ったり発展問題を渡したりして力を付けさせていく。また、宿題を毎時間出し、教科担任がやりきれていることを見届ける。文字式について学習を開始する1年生1学期は、特にスモールステップで丁寧な指導を行っている。

○学年・学級では、生徒の実態に応じた経営を実践し、学習や学校生活の基盤を確かにする。多くの生徒が自ら計画を立てて家庭学習に取り組める反面、家庭学習の方法が確立していない生徒や、家庭学習の習慣がない生徒もいる。そのような生徒には、家庭学習の内容を具体的に提示し見届け、学習内容の定着や家庭学習の習慣化を図っていく。

○小中連携では、小中合同教科部会、授業研究会への相互参加などを通して、指導方法や課題点の共通理解を図り、小から中へゆるやかな接続の実現や、9カ年を見通した学び方・生き方・からだづくりの指導を実施している。

## ◆共和中学校

平均正答率による分析では、国語A・B、数学A・Bとも、全国と比較してやや低く、昨年と比較すると全体的に正答率が下がっている。該当学年は、個に応じた指導について、更なる対策が必要である。中央値による分析では、全国と比較して、国語A・Bはほぼ同等、数学A・Bは、やや低い状況です。国語は上位の生徒が多く、数学は低位の生徒が多い。特に数学については、低位の生徒の底上げが重要である。

### 考察・課題

◇国語の「話すこと・聞くこと」では、目的に応じて資料を効果的に活用して話すことはできている。「書くこと」では、根拠を明確にして自分の考えを具体的に書くことや必要な情報を集めるための見直しをもつことに課題がある。「読むこと」では、登場人物の描写に注意して読んだり登場人物の言動の意味を考えながら読んだりすることはできているが、話の展開を踏まえて一つ一つの叙述の意味を捉え内容を理解することに課題がある。「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、文脈に即して漢字を正しく読むことはできているが、語句の意味を理解し文脈の中で適切に使うことに課題がある。また、行書の特徴を理解したり楷書との違いを理解したりすることに課題がある。短答式問題・記述式問題になると無回答率が高くなることに課題がある。

◇数学の「数と式」では、分数の乗法計算、正の数・負の数の理解、簡単な一元1次方程式を解くことはできているので、基礎的な計算技能や数についての知識は定着しつつあると考えられる。「図形」では、図形の性質の理解や数学的な表現を用いて証明することに課題がある。「関数」では、グラフから2つの数量の変化や対応を読み取ることや具体的事象を数学的に解釈して数学的に説明することに課題がある。「資料の活用」では、資料から範囲を読み取ることや資料の傾向を的確に捉え判断理由を数学的な表現を用いて説明することに課題がある。記述式問題の無回答率がきわめて高く、正答率が低いことが課題である。

### 改善策

○国語では、授業の中での漢字テストや漢字のスキルアップテストを、定期的、継続的に行うことで漢字の定着を図っていく。1時間の授業のまとめでポイントとなる言葉を示したり、段落の指定をして書く内容を明確にしたりするなど、条件をつけてまとめることで書く力を高めていく。朝読書や全校読書などを利用して、短い課題図書を読み、簡単な感想を書くことに取り組み、難しい文章での理解力や読解力を高めていく。

○数学では、前時のまとめを発表させたり小テストで計算方法を確かめたりするスキルアップUP活動を毎時間位置づけ、基礎基本の定着を図っていく。数学的用語をキーワードとして文章でまとめる活動を入れ、表現力を高める。レディネステストで生徒のつまずきを把握し、手立てをもって授業にあたる。文章問題で、解く手順を全体で明確にし、スモールステップで問題に取り組ませるよう工夫していく。また、絵図や線分図を使って問題を提示したり、ヒントカードを使って記述したりする手立てをもって授業を行う。

○全教科を通して、既習事項の確認や基礎基本の定着を図るために、「スキルUP活動」を位置づけ充実させる。授業のねらいを明確にして生徒に目的意識をもたせて主体的に学ばせる工夫をしていく。レディネステスト等で生徒の実態やつまずきを把握し、手立てをもって授業にあたる。ペアやグループ学習、スクランブル交流、少人数指導など、「学びの工夫」を行い仲間との練り合いを大切にしながら、学力の向上に努めていく。教科の本質に関わるキーワード

を用いて学習のまとめをさせ、表現力を高めていく。教師の問い返し（深める発問）や資料、技能ポイントの提示をすることで、思考力や表現力、技能を高められるよう努めていく。

## 小学校

平均正答率による分析では、全国も岐阜県も、昨年度の結果と比較すると、国語Aは1～2ポイント上がり、国語Bは同等、国語Aの問題は昨年度と比較して難易度がやや下がっているとする。算数Aは同等、算数Bは2ポイントほど低く、算数Bの問題は昨年度と比較して難易度がやや上がっていると言え。御嵩町全体の結果は、国語A・Bとも、全国と比較してほぼ同等で、昨年度と比較して向上している。算数A・Bとも、全国と比較してやや低く、昨年度と比較しても下がっている。算数の指導の在り方について、見直す必要があると言える。中央値による分析では、御嵩町全体の結果は、国語Aは全国と同等、国語Bは全国よりやや高く、昨年度より向上している。算数A・Bは全国と比較してやや低く、昨年度より下がっている。国語は、上位の児童が多いことが分かる。

### ◆上之郷小学校

平均正答率による分析では、国語A・B、算数A、Bともに、全国と比較して高く、昨年度と比較しても、全体的に正答率が上がっている。個に応じたきめ細かな指導の成果といえる。中央値による分析では、全国と比較して、国語A・Bは高く、算数Aは同等、算数Bは、やや高い状況で、上位に位置する児童が多いことが分かる。少人数指導の成果である。

#### 考察・課題

◇国語では、ことわざの意味を理解する問題、漢字の読み・漢字の書きの問題、文章全体の構成を考える問題、目的に応じて、文を引用する問題、場面の描写をまとめる言葉を選ぶ問題の正答率が高い。しかし、一部の漢字の書き問題、目的や意図に応じ、必要な内容を整理して書く問題、物語を読み、具体的な叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめる問題の正答率がやや低い。

◇算数では、乗法で表すことができる2つの数量の関係を理解する問題、小数をかける乗法の問題場面を理解し、数量の関係を数直線に表す問題、小数と整数の混じった四則計算の問題、問題場面に示されたことを式に表す問題の正答率が高い。しかし、日常生活の事象を数理的に捉える問題、基準量と割合を基に、比較量に近いものを判断し、その理由を言葉や式を用いて記述する問題の正答率がやや低い。

◇家庭生活習慣・家庭学習習慣は良好である。また、学校生活習慣・学校での人間関係・規範意識・学校生活の充実感・学習意欲も良好である。自己肯定感が高いが、将来の夢や目標についてあまり考えていない児童もいる。

#### 改善策

○学習の深化・発展としての取組（漢字検定の受験、各種コンクールへの応募、スポーツ交流会、出前授業、放課後子ども教室など）を行い、児童の興味・関心・意欲を高める。

○国語では、多読・速読・精読・摘読などを行うようにさせる。教科書巻末の学習上のキーワード・文法・ことわざ・熟語などの小単元もおろそかにしない。授業で学習する作文・表現の学習を家庭学習の日記作文に般化させる。

○算数では立式するに当たって、手の動き、テープ図、線分図、数直線を使ったり、小数でわる・かけるなどで戸惑うときは整数に置き換えて考えさせたりする。根拠を明らかにして筋道を立てて考え、言葉・数・式・図・グラフ・表等に関連させて思考過程をノートに書いたり、交流したりするなど算数科における言語活動を充実していく。

○自己肯定感が低い児童には、成功体験を積めるよう、分かりやすい環境設定・適切な支援・失敗が予想される場面にはあらかじめ手を打つなどの工夫をする。

### ◆御嵩小学校

平均正答率による分析では、国語A・Bともに、全国と比較してやや高く、昨年度と比較しても向上している。算数A・Bともに、全国と比較してやや低い状況。該当学年は、特に算数での個に応じた指導について、更なる対策が必要である。中央値による分析では、全国と比較して、国語Aはやや低く、国語Bはやや高く、算数A・Bは、同等。特に算数では、下位の児童の底上げが課題だと言える。

#### 考察・課題

◇国語では、全体的には、県や全国とほぼ同様の傾向である。領域では「読む」「書く」設問形式では選択式がやや上回っている。A問題の「話す」「聞く」と短答式で弱さが見られる。B問題では正答率が上回っているのにも関わらず、無解答が多い項目があり、学力の二極化がうかがわれる。特にB問題の「関心意欲」と記述式で無解答が目立つ。あきらめずに取り組む我慢強さが必要である。正答数別の分布図を見ると、国語では、国や県の分布に比べ、極端に低いところと高いところが見られる。A問題では、中央値でピークが見られるが、B問題では、むしろ中央値や平均値で低くなっており、二極化の様相を呈している。

◇算数では、全般的に全国・県と同じ傾向であるが、B問題の短答式のみ全国・県を上回った。全国に比べ、4～5ポイント以上下回るものが目立つ。B問題「図形」は、全国・県とも低いものの、さらにその半分程度しか正答していないことから、一番の課題である。A問題では、ほとんど無解答がないのに、B問題では、1割近く無解答がある項目が多く、B問題記述式では15%(10名)いる。正答数別の分布図では、算数でも、二極化の傾向が見られる。

◇児童質問紙では、話し合いにおいて、『友達の前で自分の考えや意見を発言する』ことはあまり得意ではないものの、『友達の話や意見を最後まで聞き』、『友達の考えを受け止めて自分の考えをもつ』ことができているようである。また、『自分で課題を立てて情報を集め整理して調べたことを発表』する活動に、総合的な学習や、5年生までの様々な授業で取り組んできたと感じている。算数では『解き方がわからないとき、あきらめずにいろいろな方法を考え』たり、『公式やきまりを習う時、そのわけを理解しよう』とする姿勢がみられる。国語では、読書の好きな児童が多い。『物事を最後までやって嬉しかった』という児童が多く、『自分にはよいところがある』と感じている児童が半数近くいる。将来の夢や目標は、半分強しかもっておらず、県・全国に比べると少ない。

#### 改善策

○学力の二極化がうかがわれ、低次の児童の引き上げはもちろん、中位児童へのてこ入れが必要と思われる。解答の仕方の指導や、見直しなど点を取りこぼさない指導も必要である。また、国語の力はある程度身に付いているのだが、算数では、それが生かされていないようである。基礎基本の技能面の習熟に加え、問題をじっくり読み、順序だてて説明するなど、言語活動を多く取り入れた表現力の育成も必要である。

○職員の間で、キャリア教育の重要性が話題となり、来年度に向けての取り組みを計画している。様々な人やその生き方に触れることで、将来の夢や目標につながり、それが学び方にもつながるのではないかと考える。

## ◆伏見小学校

平均正答率による分析では、国語A、B、算数A・Bともに、全国と比較してやや低いが、昨年度と比較して、国語Aが向上している。国語科の研究の成果である。他は全体的に正答率が下がっている。該当学年の個に応じた指導について、更なる対策が必要である。中央値による分析では、全国と比較して、国語A・Bは、ほぼ同等、算数A・Bは、やや低い状況である。国語は、上位に位置する児童が多い。上位の児童を活躍させ、仲間と学び合う学習を組織することが重要である。

### 考察・課題

◇国語では、話し合いの報告の説明として適切なものを選択する問題や、俳句の情景について考えたことや俳句のよさとして適切なものを選択する問題は、正答率が高い。しかし、資料から、新聞を書くために読むとよい段落を選択する問題や、漢字を書く問題は、正答率が低い。

◇算数では、商を分数で表すわり算の問題や、仮の平均の考えを活用して測定値の平均を求める問題、割合を比較するという目的に適したグラフを選ぶ問題は、正答率が高い。しかし、加法と乗法の混合した整数と小数の計算や、資料から二次元表の合計欄に入る数を求める問題、二つの数量の関係を一般化して捉え、そのきまりを記述する問題、示された資料から必要な数値を選び、その求め方と答えを記述する問題は正答率が低い。

◇生活習慣は、前年に引き続き改善されてきているが、携帯電話やスマートフォンに依存する傾向がより強くなり、家庭学習への影響が懸念される。家庭での予習・復習の状況を問う設問の結果が芳しくないことから、大きな課題である。

### 改善策

○国語では、新聞などの資料を活用した学習を大切にしていける。日常から、新聞に接する機会を確保するとともに、読書にも力を入れていく。漢字学習は、ただ書くだけの学習ではなく、文章の中でも正しく活用できるよう、日常の日記指導などを大切にする。○算数では、四則混合の計算や最小公倍数、図形に関わる問題など、基礎的な内容で躓いている児童が多い。基礎的な内容の反復習熟を通して、理解の見届けをしていく。算数Bでは、どの設問も無回答率が高い。数ページに渡って展開される問題に対して、諦めないで取り組もうとする姿勢に弱さを感じる。日常の学習や生活の中でも、根気強く取り組む姿を大切にしていける。○どちらの教科でも、長い問題文を読み取って答えていく力に弱さを感じる。問題文の重要な部分に線を引いたりチェックを入れたりしながら、大切な事柄に着目できるような学習方法も身に付けさせる。言葉と数を使って記述で答える問題で、誤答や無回答が目立つ。自分の考えを仲間に説明するとき、話すだけでなく、ノートに書いてまとめる力も身に付けさせる。

○共和中学校区での家庭学習強化週間中は、学習時間を確保して勉強する姿が増えている。期間中に設定するノーメディアデーの取組は、達成率も上がり成果となっている。強化週間の取組が日常の取組に推移し、メディアへの依存が減少していくよう、家庭との連携のもと、指導を継続していく。

## 御嵩町教育委員会の取組

## 御嵩町学力向上推進事業について

### ◆小中連携・中学校ぐるみの学力向上の取組

確かな学力を育むため、平成22年度から「御嵩町学力向上推進事業」として、小中連携・中学校ぐるみの学力向上に取り組んできた。校区の小中交流会は年3回(春・夏・秋)開催し、教職員や児童生徒の交流が深められ、平成25年度より、秋の交流会の内、指定した校区の交流会に御嵩町全教職員が参加し、御嵩町全体の取組となるよう、実践内容の共通理解を図るようにした。下記の内容で取り組んでいる。

- 1 事業のスローガン…「楽しいな 分かったよ できたよ」 高まる子ども みんなの力で
- 2 事業の目的…自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決していくための資質や能力を身につけさせ、確かな学力・豊かな心・健やかな体を育む。→ 一人一人に「生きる力」を育む。
- 3 事業の「学力」とは…教科で身につけさせたい力(知)に限らず、社会性(徳)の育成や健康な生活づくり(体)の面等、人としての向上の変容を生み出す力に基本を置く。
- 4 事業のスローガン「みんなの力で」の4観点
  - (1) 学校……………生きる力を育み、確かな学力を身に付けさせるための「授業改善」の推進
  - (2) 校種連携……………幼保小中高の連携や積み上げ、接続を大切にし、幼保小中高を見通した教育の構築
  - (3) 家庭・地域連携…家庭や地域との連携を深め、それぞれの教育力を生かし、活用する教育の構築
  - (4) 児童生徒……………学力の向上のために、児童生徒が自主的・自立的に取り組む活動の推進

### ◆「3つの見届ける」を授業改善の視点とし、読書と笑顔の指導を更に充実させる

◇平成29年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査の目玉は、児童生徒質問紙の中学校41番、小学校39番の「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれますか。」である。御嵩町は、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」が小中学校とも、全国より2ポイントほど低い状況。個に応じたきめ細かな指導により、分かるまで教えてくれているかどうかの児童生徒の意識は、授業改善の重要なポイントである。「3つの見届ける」を授業改善の視点とし、個に応じたきめ細かな指導の充実を今後も更に推進していく。

◇児童生徒質問紙の中学校18番、小学校18番の「学校の授業時間以外に、普段(月～金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、読書をしていますか。」では、御嵩町は「2時間以上」と「1時間以上」が、小中学校とも、全国より2から4ポイントほど高い状況。今回の調査で、御嵩町の児童生徒の国語の成績が向上している理由の一つだと考える。

◇また、児童生徒質問紙の中学校19番、小学校19番の「昼休みや放課後、学校が休みの日に、本を読んだり、借りたりするために、学校図書館や地域の図書館にどれくらい行きますか。」では、御嵩町は「週に4回以上行く」と「週に1～3回程度行く」が、小中学校とも、全国より7から18ポイントほど高い状況。図書館へ行く児童生徒が多いという実態は、「御嵩町子どもの読書活動推進計画」を改訂していく上で、大きな励みとなっている。

◇児童生徒質問紙の中学校54番、小学校52番の「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。」では、御嵩町は「当てはまる」が、小中学校とも、全国より3から5ポイントほど高い状況。「御嵩町子どもの笑顔づくり条例」に基づく、「笑顔づくり標語募集」や「笑顔づくり子どもサミット」「笑顔づくり学校表彰」等の取組の成果が出てきている。